週刊メッセージ “ユナタン” 5

～ ピアニカ（鍵盤ハーモニカ）のおけいこ ① ～

平成 27 年 10 月 28 日　片山喜章

ある子にとって夢中になれるピアニカ演奏、また、ある子にとっては苦痛でしかないピアニカのお稽古。何が愉しくて、なぜ辛くなるのでしょう。今回と次回、昨年 11 月のA園のエピソードをもとに「愉しさ」と「辛さ」の両者の溝を埋める「教育方法」について言及してみます。

＊ *A園以外、現在、ピアニカの導入を検討中の園や下記の「指導法」を検討している園があります。このレポート（実践報告）は、あくまで“めざす教育のあり方”を示すモデルです。*

「自分の指使いしだいで慣れ親しんだメロディを自分の意志で奏でることができる」　こんな素敵なことはありません。自分が操作して現れ出た“音色”が“メロディライン”をまとって、空間に放たれる快感。この時、メロディを奏でながら、その子は《自分という存在》を強く実感していると思います。そんな機会を提供することは「乳幼児教育の１つの役割である」と認識し自覚することが私たちの務めだと感じています。しかし一般に、この業界では、ピアニカの吹奏となると「発表会」などにおいて「合奏」という形で「練習成果をお披露目する」ことだと解されて、練習方法を深く検討し吟味する慣習はない、と個人的には胸を焦がしています。

「合奏」を保育指針や教育要領の《表現》という《領域》のなかの《ねらいと内容》の１つの「活動」と捉えることが、この業界の通説、慣習になっていると言ってよいでしょう。確かに、「合奏」や「合唱」は、一体感や連帯感を味わうことができます。しかし、運動会の取り組みのなかでもお伝えしたように、どのような「練習方法」「体得過程」が子どもの真の育ちとして、有意義なのかという“創意ある取り組み方”を論じる必要があります。けれども「合奏当日、子どもたちが凛々しい姿で上手に演奏できれば大満足」　世間一般の感覚であると同時に教育界の現状！でもあると思います。**「より教育的価値の高い練習法とは？・・・」**　（ぎゃっ）なんだか“ウザイ問い”です（よね）。けれども、この“ウザイ問い”を重く受けとめて、昨年、A園で取り組んだ「ピアニカのお稽古」の実践報告とコメントです。

一般に「ピアニカのお稽古」といえば、先生が前に出て、一音、一音、全体で確かめながら楽曲を仕上げていくイメージがあります。鍵盤には、ド・レ・ミがわかるように色つきのシールを貼る園が圧倒的に多いと言ってよいでしょう。多くの幼稚園、保育園で見られる光景です。

このように楽曲を分解して、先生主導で１音、１音、全体で押さえていくお稽古を「耐え難い」と感じる子どもが「時代の進歩」「子どもの進化」とともに増えてきているのです。この類のテーマは、ピアニカ指導に限らず、学校教育の授業法の根幹にかかわる重要なテーマです。

昨年、11 月、A園が法人内の公開保育を受けたときの光景です。「活動室」に 5 歳児の子どもがピアニカとイスを持ってやって来て、ばらばらに座りました。担任が声をかけるとピアニカセンセイという子どもが 5 人くらい前に出て「私のところに来てください」と生徒を募ります。ピアニカセンセイは、それぞれ分散して自分の“教室空間”を確保します。他の子どもたちはテキトーにセンセイを選んで、その周りに椅子を置いて、その上にピアニカをのせて準備します。そこから先は、まるで吹奏楽部の部室のように“ぴーぴゅー♪♬♪”と騒々しい限りです。

そして担任は、パイプ椅子に座ったまま、黙って個々の様子を観察しているだけでした。

約 15 分後、担任が「それでは・・」と合図を送ると全体が静まりました。

静けさのなか、担任がキーボドで前奏を弾き始めると、それぞれの場所から「メリーさんの羊」が吹き出されます。合奏です。他園の見学者が一様に驚いたのは、合奏の出来栄えではなくて、その前に“子どもが子どもに教えていた光景”でした。騒々しかったのは、センセイとセイトという関係で子どもどうしが盛んに教え合いをしていた事です。1 人で 2 人、3 人を同時に教えたり、教わったら自分ひとりで練習したり、ある男児の後ろから、指をそえて個人レッスンする女児がいたり、実に様々でした。では、そのセンセイは、どのように育成されたのでしょう？

運動、音楽、竹馬、コマ回しなどの技芸には、個々によって適性（向き不向き）があります。午後の自由な時間、ピアニカコーナーを設定すると、家でピアノを習ったり、音楽好きの女の子たちが集ってピアニカ演奏をしたり腕前を競い合ったりします。その子たちは、ジブリの楽曲など色々な曲を吹きこなします。譜面がなくても自分たちで“音探し”をして楽曲を仕上げます。そんな彼女たちに「メリーさんの羊」のセンセイになってみませんか？　と頼んでみると、子どもが本来、持っている（大人以上の）使命感がくすぐられ、うれし恥ずかしの表情を現わして、「快諾」してくれました。それが発端でこの「練習法」が生まれたのでした。

しかし「自分が吹ける事」と「クラスの友達に教える事」は別物です。ここから、他ではまず見られない不思議な教育（状況）がはじまったのです。まず、腕に自信のある子たちが「自分はセンセイになる」と宣誓します。担任が「センセイ」の称号をあたえます。そしてセンセイ以外の子どもたちがセイトとして、自分の好きなセンセイを選びます。この辺りは微妙です。センセイはセイトが 10 人も来たら、たいへん！　かとって、たった 1 人なら寂しいし、もしも、ゼロなら・・と戸惑いながら「どうぞ、どうぞ！」「おいで、おいで！」とアピールしていました。

いざ、子どもが子どもに教えるピアニカの練習のスタート。

世間一般の保育者主導の練習ではゼッタイ見られない子どもどうしの数々の葛藤、自己発揮のドラマが展開されました。実に興味深かったです……（11 月 4 日 **“ユナタン” 6**　に続く）